

聖地のこどもニュース

オリーブの木

No. 67
2018年 2月

▶ 分離の壁の内側には、イスラエルの占領政策に対するいろいろな風刺画が描かれる。ここでは、占領者を怪物として表現している。つい最近トランプ米大統領の顔も書き加えられた。(監視塔の右側)



支援者の皆様、

エルサレムでは、トランプ大統領の「エルサレムはイスラエルの首都」宣言以来、人々の憎悪と不安が一層高まり、イスラエル・パレスチナ双方で多くの尊い命が失われ負傷者も出ています。ヨルダン川西岸地区では住宅や学校、道路が破壊され、分離壁が増設されて、行動や教育の自由がますます制限されているのです。

まもなくスタディツアーが始まります。イブラヒム神父などたくさんの人々の助けを借りて安全には万全を期します。参加の若者たちには、現地の人々の心の叫びをしっかりと聞いて、紛争の実情を見極めてほしいと思います。そして、暴力の連鎖を断ち切るにはどうすればよいのか、正義と公平に基づく「平和への道」をどうすれば見つけることができるのかをしっかりと考えてもらいたい。将来、国際人道支援の分野で働きたいと希望する参加者たち。彼らにとってこのツアーが実り多いものとなりますように。

理事長 井上 弘子



認定NPO法人

聖地のこどもを支える会



当NPOは、国際協力NGOセンター(JANIC)によるアカウンタビリティ・セルフチェックを受け、基準の4分野(組織運営・事業実施・会計・情報公開)について適正に運営されていると審査されました。

事務局 〒164-0003 東京都中野区東中野 5-8-7-502 Email ispalejpn@gmail.com TEL/FAX 03-6908-6571

ご支援は… 郵便振替 00180-4-88173 加入者名 「NPO法人 聖地のこどもを支える会」

当法人へのご寄付は、税制優遇が受けられます。

<http://seichi-no-kodomo.org>



タリーヌ・ラマ（ラマラ在住、2017年「平和の架け橋プロジェクト」参加者）

私のまわりを見回し、パレスチナ人として住んでいるこの世界の現実を観察しながら、私はいつも思う。いったい誰がこの世界に住みたいと思うだろうか？誰がここで

無垢な子どもたちを教育したいと思うだろうか？平和を実現するのがそんなに難しいのか？

私はインティファダという紛争を生きているパレスチナ人として、そしてまだイスラエルの占領下にいるパレスチナ人として声をあげたい。「私たちはただ単純に普通の生活が欲しい。占領や苦しみや痛みや戦争が終わり、公平と人権と自由に基づいた永続的な平和が欲しいだけなのだ」と。

かつてマザーテレサは言われた。「もしあなたが世界を変えたければ、家に帰ってあなたの家族を愛しなさい」と。私は個人としてこの紛争に満ちた世界に平和をもたらすために何の力も持っていない。だから、もし私が平和の作り手になりたいなら、私のそばにいる人々を愛することしかできない。平和の作り手とは、毎日少しでも世界を平和な場所にするために、小さな方法でも自分のまわりから平和をつくる人のことなのだ。人間である私たちは信じられないほどの潜在能力を持っている。もちろん簡単にあるいは即座に解決方法が見つかるわけではない。それは若い者も年老いたものも常に学ばなければならないことなのだ。

残念なことに、今年になって、それでなくても複雑に絡み合った平和の問題をさらに難しく、さらに人々の苦しみを増す事態が起きてしまった。アメリカがエルサレムをイスラエルの首都として承認し、大使館をテルアビブからエルサレムに移すと宣言したからである。トランプ大統領は、イスラエルの「民主主義」を賞賛している。自分はまだイスラエルとパレスチナの紛争解決のために残っている希望を確かなものにするために「現実」を追認しただけなのだ。

パレスチナ人はイスラエルと占領下にあるパレスチナの平和交渉の仲介役としてアメリカ合衆国をもはや信用しない。トランプの決定は実は合衆国は中東における彼らの同盟国イスラエルに肩入れするという長い間隔されてきた真実を暴露しただけだ。

トランプの宣言のあと、多くのパレスチナ人が抗議のために街に繰り出し、実際には現状に何の変更をもたらすでもない(無駄な)決定のために沢山の人の命が失われた。エルサレムはもうずっと前から、国際法違反もかわらず、イスラエルに併合されており、その多くの地域が非合法的ユダヤ人入植地となりつつあるのに、誰も抗議の声をあげない。

イスラエル側の見解も興味深いものがある。ほとんどとは言わないまでも多くの人々は、トランプの決定は、現状を何も変えるものではないと思っている。彼らは、エルサレムは何千年も前からイスラエルの首都だと考えているからだ。皮肉にもイスラエルが建国されてからたった70年しか経っていないのに。

とはいえ、私たちは決していつか平和な世界に住めるという希望と信頼を失ってはならない。平和は私たちの責任である。だから私たち自身「平和」になろう。



認定NPO法人聖地のこどもを支える会の 会員になりませんか？

さまざまなプロジェクトをはじめ、教育支援事業など、当会の活動を総合的に支えていただく会員制度。あなたのご意見が、平和のつくり手を育てます。事務局までお気軽にお申し出ください。

正会員	個人	年額 12,000円／1口
	学生	年額 6,000円／1口
サポート会員		年額 6,000円／1口

正会員は、当法人の総会等での議決権を行使することができます。

人騒がせな「首都エルサレム」承認発言

村上 宏一（当法人理事・元朝日新聞中東アフリカ総局長）

米国のトランプ大統領の発言が、また世界を騒がせています。去年12月6日に「エルサレムをイスラエルの首都と認める」と宣言したことです。1年前の63号に寄せた私論「『トランプ時代』の中東はどうなる」で、発足したばかりのトランプ政権の親イスラエルに偏った姿勢を指摘しましたが、理由の一つがエルサレム問題でした。トランプ氏は大統領選の最中から、現在テルアビブにある米国大使館をエルサレムに移すと表明していました。

地位が定まっていないエルサレム

イスラエルが首都としているエルサレムに大使館を移すというのが、なぜそんなに問題なのでしょう。そもそも米国などの主要国をはじめほとんどの国が大使館を置いていないのはなぜなのか――話は第2次世界大戦後の1947年にさかのぼります。

第1次世界大戦後に英国委任統治領となっていたパレスチナの地（注）を、ユダヤ人国家とアラブ

人国家に分割することを提案した国連決議181号が採択され、その中でエルサレムは国際管理下に置くとされました。周辺のアラブ諸国は決議そのものに対し、自分たちの土地に突然ユダヤ人国家をつくるものだということで反対。翌年のイスラエル建国宣言を機に攻撃を仕掛け、第1次中東戦争となりました。エルサレムは激しい争奪戦の地となり、停戦が実現した時の境界線をはさんで東がアラブ側（当時はヨルダン領）、西がイスラエル側となったのです（地図参照）。

ところが67年の第3次中東戦争で、全エルサレムを含むヨルダン川西岸やガザなどを占領したイスラエルは、エルサレムを「不可分のイスラエルの首都」と一方的に宣言したのです。

国連では「戦争による領土の獲得は認めない」とし、「占領地からのイスラエル軍の撤退」を求める決議242号を採択しました。そもそも決議181号がエルサレムを国際管理都市としたのは、ユダヤ教だけでなくイスラム教、キリスト教の聖地でもあり、特にイスラム教徒の多いアラブ諸国にとってイスラエル化は受け入れられないなど、入り組んだ事情があるからです。そしてパレスチナ自治政府は、東エルサレムを将来のパレスチナ国家の首都とする方針を示しています。パレスチナ自治に道を開いたオスロ合意でも、様々な問題を抱えたエルサレムの地位については、イスラエルとパレスチナ自治政府が話し合っているとしています。

以上述べてきたように、エルサレムについては帰属をどうするかなど、その地位が定まらないため、大半の国が大使館をエルサレムではなくテルアビブに置いているのです。

（注）ここでの「パレスチナの地」とは、オスマントルコ帝国領シリアの南部を指す。第一次世界大戦で敗れたトルコの領土分割の結果、パレスチナは国際連盟による承諾のもと、英国委任統治領となった。英国は委任統治領をヨルダン川より西の「パレスチナ」と東の



「トランスヨルダン」に分け、西岸は直轄支配、トランスヨルダンはアラブの有力な王族ハーシム家の自治領とした。



国内問題に 国際問題を利用？

トランプ氏がこの時期にエルサレム首都宣言をした背景に、米アラバマ州上院議員の補欠選挙がある、という説があります。

12月12日に投票されたこの選挙で、トランプ氏は共和党から立候補していたロイ・ムーア氏を支持していました。アラバマ州は米国でも屈指の保守州といわれ、共和党の牙城でムーア氏の圧勝が予想されていたのですが、過去に少女へのわいせつ行為があったという疑惑が浮上、選挙の行方があやしくなりました。そこで大統領は、自分の選挙の時から「トランプ氏支持」を表明していたムーア氏にテコ入れするため、エルサレム首都宣言をしたというのです。

エルサレム問題がなぜアラバマの補欠選挙と結びつくのか。アラバマ州をはじめ米国南部には「キリスト教原理主義者」とも呼ばれる保守キリスト教徒が多く、彼らは熱烈なイスラエル支持者であり、エルサレムをイスラエルの首都として承認することを求めています。この人々にアピールしてムーア氏への投票につなげようと、この宣言をしたというわけです。

容易に決着をつけられない国際的な大問題を国内の選挙戦に利用しようとしたとは、にわかに信じられない話ですが、歴史や国際事情など構いなしに「米国第一」を振りかざすこれまでの言動をみると、この説を否定しきれないように思います。

進むエルサレムの「イスラエル化」

アラバマ補選で、結局ムーア氏は落選。一方、国際社会は、これまでの経緯を無視してエルサレムを首都と認めることは和平の基本条件を壊すものだと強く懸念し、12月21日に開かれた国連総会の緊急特別会合では、「エルサレムをイスラエルの首都に認定した決定は無効」とする決議を賛成多数で採択しました。投票に際しトランプ政権は、賛成票を投じた国には金融支援を打ち切ると、露骨な脅しをかけています。これでは、イスラエルとパレスチナ自治政府の和平交渉の仲介に努めようとしてきた米国に、もはや公平な役割を期待できなくなります。

自治政府のアッバス議長は、米大使館がエルサレムに移転すればオスロ合意で認めたイスラエル国の承認の取り消しを検討すると表明。パレスチナ各地では、トランプ宣言に反発する抗議行動が激化してイスラエル治安部隊と衝突し、実弾による銃撃も受けて死者も出ました。

では、実際のエルサレムはどうなっているのか。1967年の第3次中東戦争後しばらくは、東西を分けていた第1次中東戦争の休戦ラインがはっきりしていて、旧市街に近い一帯は、少なくとも80年代前半まではゴーストタウンのようでした。それがすっかり整地されて、今は高級住宅地までできています。そして、パレスチナ人居住地区だった東側に次々とユダヤ人入植地が作られ、その数は10カ所に及び、人口は20万人を超えて東エルサレムのパレスチナ人の人口に匹敵するほどになっているといわれています。

全エルサレムのイスラエル化が進められている、と言ってもいいでしょう。

今年も、2月22日から3月5日まで12日間にわたって、日本人大学生のためにイスラエル・パレスチナ スタディツアーを行います。今年のツアー参加者数は、学生12名と社会人2名です。

実り多いツアーにするため、2回にわたって事前研修を開催しました。第1回は泊りがけで1月13日、14日にJICA東京国際センターで、第2回は2月3日に同所で開催しました。

第1回の研修では、イスラエル・パレスチナに関する基本的な情報の事前課題の調査と発表、現地の人々の苦しみ、悲しみ、怒り不安などを追体験するロール・プレイング（役割分担劇）、さらに参加者同士の絆を深める内容の研修を実施しました。

第2回の研修では、各自の近況報告、スカイプによる現地スタッフ/ヤクブとの初コンタクト、およびツアー中のスケジュールや持物の確認など具体的にツアーに備えるための内容を説明し、イスラエル/パレスチナ訪問への期待感を高めることができました。

研修を終え、代表して参加者3名のツアーに向けた決意表明をご紹介します。

「平和への関心」をより多くの人に 石塚 花音（大学2年）

私が今回のスタディツアーに応募したきっかけは、現地に行くことで自分の中東への興味をより深め、大学で学んだことを確認するということでした。しかし、「行ってみたい」「文献でなくて現地のことが知りたい」という思いが一番強かったのが正直な気持ちです。

参加が決まってから、課題発表のために自分で調査したことや事前研修で参加者との交流を経た今、自分の決意表明は、大きく分けて三つの目標になります。一つ目は現地の人々の経験、思い、そして悲しみにふれ、理解できるようになること、二つ目は文献で得た情報と現地で肌で感じた情報の違いを知ること、三つ目は今回のツアーの参加者はもちろん



▲事前研修の一コマ：「あなたにとって平和とは？」のワークショップ

ツアーで出会う問題意識や将来像について聞くことで長く続く関係を作ることです。これらを達成するにはまず、基本的な知識はもちろん、このイスラエル/パレスチナ問題に関する情報、知識を得ること、そしてコミュニケーションツールとしての言語を残り少ない日数の中で、できるだけ向上を図ることが必要だと考えています。

では、これらを達成するためにはどうするか、私はこの問題をテーマにしたメディア作品に触れることを一つの方法として取ろうと思っています。これらのメディア作品に触れることで「何を訴えたいか」が、また映像化されているので現状に近いものが見られるのではないかと考えたからです。そしてなおかつ言語にも触れられると思います。現地に行くことが理解に大きな助けとなることは間違いないと考えていますが、映画で描かれていることと現地で感じることに少なからず違い“はあると思います。そのことを知ってから行くことは個人的に大きいものではないかと思っています。

今回このツアーに参加するまでは中東に関心はあったものの、イスラエル/パレスチナ紛争の本質についてはそれほど知りませんでした。しかし今はツアーからもっと知りたいという気持ちが高まっています。もちろん知れば知るほどわからなくなり、“解決”は難しいと考えます。しかし、同じ考えを持つ人たちがいることを知り、また携わっている方々の存在を知ると私も知りたいという思いが強くなる

ります。なので、このツアーに行った後には自分がパレスチナ人、イスラエル人、日本人を問わず話を聞いて得たこと、経験、そしてこのツアーの存在を色々な人に話し、「平和問題」に関心を持つことの大切さをより多くの人々に伝えて行きたいと思います。そのためには、先輩の方の意見やアドバイスを聞き、後悔しないように前述したような自分ができる最善の準備をして出発に備えたいと思います。

百聞は一見にしかず

吉田 梨乃(大学2年)

私は将来、国際社会でマイノリティの権利を守るために働く国際協力師になりたいと考えています。だから私は、このツアーが私の実現したい「一人一人の権利が尊重される社会」への第一歩となる経験となることを望んでいます。そのために「他者の痛みを知る」こと「平和」という言葉に対する自分なりの定義づけ」をすることを目標にこのツアーに参加します。

パレスチナ問題は決して、今まで平和ボケして人生において苦労も挫折も味わってこなかったちっぽけな私が理解できるようなものではなく、またその世界に生きる人々の痛みを理解することは不可能に近いことかもしれません。しかし、「苦しみは見たものに責任を負わせる」という言葉にもあるように、このツアーのOB・OGの方々は、現地で見た問題をツアー後も、一人一人が心に留め続けていて、「理解できるわけがない」と諦めるのではなく、「彼らに寄り添い、双方の架け橋となろう」としています。

私も彼ら彼女らのように、他者の痛みを知り、寄り添い、そして微力たりとも行動に移し、人に伝える人になりたいと思いました。

現地では、私の日常とはかけ離れた現実があり、彼らの日常に溢れている“当たり前”に戸惑うこともあるでしょう。また無宗教な私にとって、神様を信仰すること、祈りを捧げること、それが連帯意識を生み出し対立にまで発展すること、今でもその争いが絶えないことなど、いろいろ頭を抱える経験を

するでしょう。しかし人々が大切にしている宗教は「平和」を願うはずのものであり、その「平和」とは何なのか。日本という中立的な立場にいる国に生まれた私が、微力ではあっても何かができるのか。

私は彼らから「平和」とは何かを学び、その定義を自分の中に持てることをめざしたい。将来マイノリティの権利を守るために働く国際協力師の一人となりたい私にとって、また、大学院で平和構築の研究を進めるためにも、その定義は多いに役立つと思います。

私の座右の銘である「百聞は一見にしかず」の言葉にもあるように、現地で見たこと聞いたこと学んだことを全て吸収し、それを日本の人々に伝えていく人になれるように、全身全霊でツアーに取り組みます。



▲吉田梨乃：アフリカ支援の活動中子どもたちと。

自分の考えを買かないで、対話に挑む

平田 すみれ(大学2年)

ツアーにかける思いを再確認するため、申し込んだ頃を思い返して、原点回帰をしておきたい。イスラエル・パレスチナ紛争という、今までの自分とは関わりが無いに等しかった問題をテーマにした本ツアーに参加したいと思った動機として、「平和活動」と「人との対話」の2つのキーワードが挙げられる。これらのキーワードを思い起こし、本ツアーに参加するわたしのモットーとして、以下の2点を掲げる。

①平和活動における自分自身の役割を考える

②現地での出会い、そしてそこから生まれる対話 の機会を大切に

まず①における「平和活動」というのも、私は長らく自分自身も世界の平和に向けて何か貢献したいと考えてきた。本ツアーは、無力ながらも自分にできることが何かしらあるかもしれない、という可能性を秘めていると感じる。そのような環境で平和活動における自分の役割を考える前に、まずは現地の人々の思いを知る必要があると思う。

そこで、ツアー中は「平和」について自分自身にも現地の人々にも問い続けたいと思う。イスラエルとパレスチナに生きる人々にとって「平和」とは何なのか、この目で見て耳で聞いて理解できるようになりたい。そして帰国後の活動も重要視したいと考えている。現地で実際に見たこと、聞いた話をより多くの日本人と共有することで、現地と日本を少しでも近づけられるような存在になりたい。日本国内でイスラエル・パレスチナ問題に対する関心が高まれば、それは政府の動きへとも繋がっていくと思うのだ。

次に②の対話であるが、私自身、現地の人々との交流が一番の楽しみにしている。私たちが現地で行う対話というのは政府や組織間では行われな、人々の心に寄り添った対話、という意味合いを持つものではないかと考える。現地での出会いは一生に一度きりのものになるかもしれない。しかし、彼らとの関係は一度きりにはしたくない。彼ら



▲事前研修の一コマ：NPO副理事長、村上宏一による講演「エルサレム問題」。質疑応答も活発に行われた。

との貴重な出会いを大切に、人とのつながりを特に意識して、現地で出会った人々にとって、自分自身が彼らの心に残る存在になれるよう、またツアー後も繋がっていけるような関係づくりを行いたいと思う。

現地での対話の際には、相手の立場に立って自分の視野を広げ相手を受け入れる、という姿勢を忘れないようにしたい。一見、当たり前のことのように思えるが、無意識に自分の考えを貫いて話をしてしまうことがあるので、ツアー中はこれを心に留めて対話に挑みたいと思う。



支援金の自動払込みサービス

ご好評を頂いている自動払込みサービス。まだの方はぜひご利用ください。

- * 毎回 郵便局へ払込みに行く手間が省けます。
- * いつからでも、いくらからでも 簡単に始められます！

お申込み・お問合せは

当法人事務局 **03-6908-6571**

または **042-636-9218** (中山)

顔の見える支援 里親募集中！

ある特定の子どもの教育を、毎月一定の支援金で継続的にサポートする里親制度。一歩進んだ国際協力のかたちです。

里親と里子の間で、写真や手紙の交換をすれば(任意)、個人的なつながりが持て、子どもの成長を身近に見守ることができます。

詳しくは、当法人事務局まで。

スタディツアー事前研修から



▲2日間のスタディツアー事前研修を終えて。尽力したユースのメンバーとともに。これまでのスタディツアーOB/OGも駆けつけた。



▲みんな打ち解けてディスカッションも弾む。



▲楽しい食事のひとつとき。



▲オリーブの収穫、良い実と悪い実の選別。

紛争の中にも、喜びと平和のひとつがあります。

さまざまに暮らし



▲パレスチナのある村の結婚式。



▲一家総出でオリーブの収穫。子どもも楽しそう。



▲ラマラにて。若者たちの民族フェスティバル。パレスチナの伝統の衣装。



エルサレムの街角で

左◀サンダルばきで自転車の練習中。

右◀観光客相手の露天商。

写真撮影：福島貴和、浅野耕二、
ダリーヌ・ラマ (Darine Lama)